

アルコール摂取による影響、心臓血管病とは負の相関、脳卒中とは正の相関

これまでの前向きコホート研究において、中程度のアルコール摂取による心臓血管病リスクの低減が示されているが、それらの研究では、試験開始時のアルコール摂取についてのみ評価されているものが多かった。また、アルコール摂取による脳卒中のリスク上昇が示唆されているが、エビデンスは十分ではない。そこで本研究では、アルコール摂取を試験開始時と一生涯について評価し、非致命的、致命的心臓血管病および脳卒中との関連について多施設ケースコホート研究を実施し検討した。

ヨーロッパ 8 か国から、心臓血管病のない 32,549 例を対象に非致命的・致命的な心臓血管病および脳卒中の発生について評価した。その結果、非致命的心臓血管病が 9,307 例、致命的心臓血管病が 1,699 例、非致命的脳卒中が 5,855 例、致命的脳卒中は 733 例発生した。試験開始時のアルコール摂取と非致命的心臓血管病リスクには負の相関がみられ、一日摂取量 12g 増加するごとのハザード比は 0.94 であった。また、試験開始時のアルコール摂取と致命的心臓血管病リスクには J カーブの関係がみられた。すなわち、総アルコール摂取量 0.1~4.9g/日と比較したハザード比は、5.0~14.9g/日群では 0.83、15.0~29.9g/日群では 0.65、30.0~59.9g/日群では 0.82 であった。これに対し、非致命的および致命的脳卒中リスクについては、試験開始時のアルコール一日摂取量 12g 増加するごとのハザード比は、非致命的脳卒中が 1.04、致命的脳卒中が 1.05 であった。虚血性、出血性脳卒中別にみても同様の所見がみられた。試験開始時と生涯の平均アルコール摂取量的心臓血管リスクとの関連は、8 か国のいずれにおいてもおよそ同様の関連がみられた。

したがって、アルコール摂取は、非致命的な心臓血管病とは負の相関、脳卒中とは正の相関を示すことが明らかとなった。今回の結果は、アルコール摂取を減らす方針のエビデンスを強めるものとなった。

出典：British Medical Journal. 2018 May 29; 361: k934.